

にいがた 平和スクール

広島平和記念資料館版

広島平和記念資料館

8月6日



8月5～7日、広島での平和研修で中学生が学んできたことを新聞にまとめました。

- 【記者】
- 新津第二中 渡部 莉子
 - 新潟第一中 小泉 駿介
 - 附属新潟中 小林 航己
 - 曾野木中 高松 來未
 - 巻西中 山賀 優
 - 五十嵐中 渡辺 舞子

2019年
10月1日
新潟市総務部総務課

原爆被害者の証言

8月6日(火)、「原爆被害者証言のつどい」に参加しました。新潟市の中学生がグループに分かれそれぞれ同った証言をレポートします。

証言レポート

寺本貴司さんは、現在84歳です。被爆当時は10歳で、爆心地から約1kmの自宅で手紙を書いているところでした。すると、背後からものすごい光を感じたそうです。そのあと真っ暗になり、寺本さんはその場にしゃがみこみました。上から物が落ちてくるのが分かり、「早く終わらないかな」と思ったそうです。だんだんと明るくなり、1人で外に逃げると家屋は全て崩れ、がれきの山となっていました。周りの人も、とても悲惨な姿だったそうです。

寺本さんは近所のおばさんと一緒に逃げました。一休みしたときに雨が降ってきて、傷口を雨でぬらさないようにとおばさんがタオルを被せてくれたそうです。そのときおばさんは、寺本さんを優先し、何も被っていませんでした。だから黒い雨が当たってしまい、2ヶ月後に放射線の影響で亡くなってしまいました。そのことを踏まえ寺本さんは、与えてもらった命を大切に一生懸命生きることが大事だとおっしゃっていました。

寺本さんのお話を聞いて、戦争や原爆について深く理解することが大切だと感じました。また、一度と同じことを繰り返さないように原爆の記憶を風化させず、次の世代の人にも受け継ぐことが必要だと思いました。



私は、この研修で学んだこと、感じたことを、今後忘れることなく、少しでも多くの人に話を伝え、原爆について知ってもらうことが大事だと思います。今後、世界を平和にしていけるために行動していきたいです。

(渡部 莉子)

僕は、小学生のときに、歴史の時間で広島について学びました。しかし、それは表の部分だけでした。実際に現地まで学んでいる内にもう一つの事実、いわゆる知らなかった部分についても学び、現地では学べなかったこともあったのでとても貴重な体験でした。

(小泉 駿介)

広島市を訪問して、現在の世の中は排外的でもあり、平和の実現には他者の尊重が必要であると考えました。現世には、核兵器廃絶と核抑止力という対立した概念が存在することは事実です。これらは否定してはならないものであり、否定の先に平和はありません。そして、最も問題なのは、この問題に向き合えないことだと思います。人々がこの問題に真摯に向き合い、1つの方向性を定めることが大切であると学びました。

(小林 航己)

私は、今回の事業に参加して学んだこと、感じたことを一人でも多くの人に伝え、原子爆弾の恐ろしさを知ってもらうことが大切だと思います。核兵器のない平和な世界を願う人が、広島から世界中、そして世界へと広がっていくことを、私は願っています。

(高松 來未)

戦争と平和について学ぶことができました。学んだことを家族や友達、次の世代の人に伝え、これからの日本が平和になり、みんなが仲良くなっているように、自分にできることをして、自分が思う平和な世の中をつくりたいです。

(山賀 優)

今回事業に参加して、自分にとって過去のできごとでしかなかった戦争を本当に恐ろしいできごととして理解を深めることができたのではないかと思います。この事業で感じた戦争への恐怖や平和の尊さをずっと忘れずに伝えていきたいです。

(渡辺 舞子)

原爆投下後の海外からの支援

今から38年前、1981年に当時のローマ法王、ヨハネ・パウロ二世が来日し、広島と長崎で演説しました。彼はその演説の中で「戦争は人間のしわざです」と言い、今までキリスト教では戦争は神が与えた試練だと考えられてきたが、彼はそれを人間が起したものだとして否定しました。僕はそのことについて



広島は戦時中、主要な軍都となっており、長崎・新潟とともに原爆投下予定地となっていました。当時の原爆は標的を肉眼で見極め、投下するものでした。だからこそ、当日の天候がとても重要でした。8月6日、広島は快晴でした。被爆者の方もその日は朝からよく晴れた日だったことをよく覚えていられるそうです。そして、主要な軍都であり、8月6日に快晴だった広島に原子爆弾が落とされることになりました。

原爆が投下された広島

1945年(昭和20年)8月6日午前8時15分、原子爆弾が広島に投下されました。一瞬にして広島の町が焼け、何万人もの命が奪われました。爆心地周辺の地表面の温度は3000℃、4000度に達したそうです。原爆投下後20分くらいから黒い雨が降り、すすや放射性物質を含んだ雨を飲んで人や、雨に濡れた人は放射線の被害にあいました。原爆による被害を直接受けなかった人でも爆心地に近いところに行き、放射線の影響で亡くなった人もいました。

とても素晴らしいことだと思いました。なぜなら、もし神父が被爆者だとしたら、原爆による被害の証言をすることができないと思っただけです。

僕は演説の内容について書かれた石碑を平和記念資料館で見ました。僕はその文を読んで世界の人々が同じようなことを言っているのと同じようなことを言っています。僕は、僕が世界で核軍縮について遅れをとっています。僕はこのように時だからこそ世界が結束すべきだと思いました。

戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命を奪います。戦争は死そのものです。過去を振り返ることは、将来に対する責任をなすことではありません。核戦争を拒否することを考えることは、平和に対する責任を取ることです。

一九八一年八月二十五日
ローマ法王、ヨハネ・パウロ二世